

自著と
その周辺

**Tetsuji Nagata : Chapter 22. Sexual difference between the
macromolecular synthesis of hepatocyte mitochondria in male and
female mice in aging as revealed by electron microscopic radioautography**
pp. 461-487, In, *Women and Aging : New Research*
Editors : Harriet T. Benninghouse and Andria G. Rosset

Nova Science
Publishers
New York
USA
A 5 版, 692pp, 2009
IBBN: 978-1-60456-575-1
US\$ 129.00

本書は米国 New York の自然科学書出版社 Nova Science Publishers 社から2009年7月に発刊された『女性と加齢』に関する医学生、医学研究者向けの英文国際的参考書である。同社は20世紀末に発足した新興出版社で、従来は社名のとおりに自然科学書の出版を行っていたが、最近では医学書の出版にも乗り出し、私は最初一昨年2007年4月に同社の社長 Frank Columbus 氏から突然メールを受信し、肩書きには同社社長兼編集長と書いてあり、私が加齢に関する論文を多数発表していることを承知しているので、同社が現在企画中のヒト女性の加齢に関する単行本の一部を分担して欲しいとの内容であった。本の題名は“Women and Aging”であり、広い分野からの論文を掲載したいので、私からも協力していただきたいとのことであった。私は、以前から動物実験、主としてマウスを利用して、動物の各種器官を構成する細胞の加齢を、組織細胞化学的に研究していたが、ヒトの細胞に関するデータはなく、すべて実験動物のものであったので、それでも良いかとメールで尋ねたところ、本書はヒトの女性のみならず実験動物の雌雄についても記載したいので、そのデータを書いてほしいとの返事で、マウスに核酸 (RNA, DNA)、蛋白質等の巨大分子合成の前駆物質を RI 標識した³H-thymidine, ³H-uridine, ³H-leucine 等を取り込ませ、肝細胞を電顕ラジオオートグラフィーして、雌雄を比較した結果について寄稿することを約束した。原稿提出の期限は2007年12月との指示で、最初に抄録を6月末までに提出することを求められ、続いて本文と図表を12月末までに送ることを約束して、夏から執筆にかかり、私は現在も長野市内の信州医療福祉専門学校の専任教授と学校長を務め、毎週2、3回は解剖学の講義 (2時間、毎週4コマ) と会議のため長野に日帰り通勤しているので、その合間に原稿を書き、また秋には電顕、組織化学、解剖学等の国内の学会と、2007年には5年に一回の国際ラジオオートグラフ会議が中国で開催され、シンポジウムオルガナイザー・座長をつとめるために前年から会長、招待講演者との連絡で多忙であり、8月には国際会議のため出国したので、原稿が予定より遅れて、12月に図表を揃え、文献を付して、結局翌2008年1月下旬になってから送ることができた。ところが、この原稿を執筆中でまだ完了していない2008年1月10日に、また Nova 社の Frank Columbus 氏からメールを受信し、原稿の督促かと思ったところそうではなく、別の本の企画で Protein Biosynthesis と題する本の分担執筆を依頼され、2月までに抄録提出を求められたので、1月末に遅れていた最初の原稿を出すと同時に次の企画も引き受ける返事をして、肝細胞に関する蛋白合成について最近では毎年日本学術振興会から文部科学省科学研究費 (奨励研究) を受領して、電顕ラジオオートグラフィーにより集中的に研究している肝細胞系粒体の蛋白合成について解説することにした。この本は、原稿締切を9月までと希望されたが、2008年11月には私が前年から依頼されていた第9回アジア太平洋国際電子顕微鏡学会の高圧電顕の医学生物学への応用と題するシンポジウムのオルガナイザー・座長を務めるため、招待講演者との連絡、抄録集の編集で多忙であり、さらに会期の11月には韓国で開催される学会に出席する準備をしながら、執筆を進め、10月に韓国の学会に出発する直前に原稿を完成して発送し、結局あとから依頼された本が先になり、予定どおり2009年3月に発刊された。この本 (Protein Biosynthesis) の経過についてはすでに本誌57巻4号 (vi-vii頁) の自著とその周辺に印刷された。

今回、改めて記載する最初に執筆を依頼され、出版が遅れた別の本 (Women and Aging) については、2008年10月になり、最初の原稿の校正刷が送られて来て、図表はまだ挿入されておらず、本文と文献表のみの校正を急いで行い、返送しておいたが、その後、再校は11月になって、私が国際学会 (第9回アジア太平洋国際電子顕微鏡学会) に出発する直前にも送られてこなかったため、そのまま学会に出て帰国した。12月になり、今度は2冊目の本 (Protein Biosynthesis) の校正刷りが送られて来て、これも図表のない本文と文献表のみの校正を終わり返送したが、それから1週後に最初の本の再校が送られて来て、今回は図表の大部分が本文の間に挿入されていたので、

位置を確認したところ、全部で12ある付図が3個足りないことがわかり、折り返し挿入されていない図について至急挿入してもう1度再校を送るように編集部に指示した。ところが、2、3日後に再びメールの返信があり、挿入されていない図3個を探したが、編集部にも印刷部にも見つからないので、もう1度送って欲しいとの返事で、驚いてとにかくもう1度、同じ図を3枚メールの添付書類で送信した。年明けに2冊目の本 (Women and Aging) の再校が送られて来て校了し、印刷は2月とのことで出版を待つばかりとなったが、最初の本の校正が遅れ、1月中旬になって再び三校が送られて来たので、確認したところ、また同じ図3個が欠落していたので、驚いて再度まだ後から送った図が3個挿入されていないと連絡した。この時に、昨年以來、編集、印刷について時々編集部から受信したメールを全部パソコンから出して見て調べた結果判明したことは、原稿の依頼は最初だけ社長兼編集長の Frank Columbus 氏からであったが、その後の連絡はすべて他の編集部員の名前で、いろいろな肩書きがついているが、約10名が全員 Susan, Stephanie 等女性のファーストネームのみの名前であることがわかった。しかも、返信者がその都度次々に変わり、編集部員が多すぎて、著者との連絡が社内でたらい回しされており、社内で良く連絡が取れているのか疑わしい状況であることが判明した。結局、図の一部を誰かが受け取ってどこかへ紛失してしまい、もう1度送ったのに別の人が受け取ってまた紛失して、それが2回続き現に編集部には探しても出てこないということが事実であるので、最後に連絡をよこした Dominic に、2月中旬になり私は3度目にまた同じ図を3枚メールで送信せざるを得ない事態となった。その後しばらく連絡がなかったので、今度は両方も順調に進行していることと想像していたところ、3月10日になり、2冊目の本 Protein Biosynthesis が先に完成して、ハードカバーの厚い本が1冊航空便で送られて来た。この本についてはすでに本誌に寄稿し、57巻4号 (自著とその周辺) に印刷された。その後、先の本はどうなっているのか Columbus 氏に問い合わせたが、しばらく返事がなく、再度問い合わせたところ、印刷が遅れているとの簡単な返事であった。結局、この本の出版は最近本年になって2009年7月で、私がハードカバーの692頁ある厚い本を航空便で受け取ったのが8月になってからであった。校正終了後、出版が遅れた原因が出版社内の問題なのか、分担執筆者の問題なのか不明であるが、最近の米国の政治、経済、学術等すべての分野における斜陽化を象徴している現象であろう。

本書の装丁は、2人の白髪の白人の女性が花園の中で白と赤の満開の花に囲まれて座っているカラー写真が表紙と裏表紙に印刷され、内容は31章からなり、肝細胞については、私だけで、骨格系と循環器系についてはそれぞれ3章ずつで多く、その他筋系が2章、呼吸器系、泌尿器系、内分泌系、神経系、感覚器系等に関する章と、器官系を特定しない全身の栄養、労働、体調、PTSD、体重、肥満、長寿等に関する章と大部分はヒトのみについての章で、実験動物に関するものは私のものと別の章の2章のみであった。各章は単著から2、3人あるいはさらに多い4、5人、最多8人の共著まで、合計83名の分担執筆であり、著者の国別では、米国から9章が最多で、次が日本5章、イタリア4章、オーストラリア2章で、他の国はドイツ、スイス、ハンガリー、ポルトガル、スペイン、ポーランド、スロベニア、パラグアイ、ギリシア、トルコ、ボスニアヘルツェゴビナ等各1章ずつであった。著者数は1人の単著は日本から私のほか、米国、スペイン、スロベニア、オーストラリア、トルコ、ポルトガル等6章のみで、2、3人の共著が米国から4章、イタリアから2章、ドイツ、スイス、パラグアイから1章、4、5人の共著が米国3章、イタリア1章で、6、7人の共著が日本から1章、著者数の最多は8人で日本1章、ギリシア1章であった。これらの数は女性 (または雌動物) の加齢に関する研究についての現在の国際情勢を反映している数値であろう。

本書の内容を通読して判断すると、本書は2009年の時点における主としてヒトの女性と加齢に関する医学的のみならず社会学的研究の集大成であり、さらにわずかながら雌の実験動物に関するデータが追加されているが、当分の間、ヒト女性ないしは動物の雌の加齢に関する基本的参考書として、世界中の医学研究者に利用されるであろうことを著者としては期待したい。

(信州大学名誉教授 永田 哲士)